

## 吃音 苦しき深く

五輪報道に紙面が埋め尽くされるなか、毎日新聞 8 月 17 日朝刊 1 面、21 面に注目した。1 面リードから一言葉が出にくい吃音を抱える人々を対象に毎日新聞が当事者団体などの協力で全国アンケートを行ったところ、6 割強が「学校や職場でいじめや差別を受けた」と回答した。「吃音への社会的理解や支援が不十分」との回答は 7 割近くに達し、吃音への無理解や社会的支援の欠如が浮き彫りになった。症状を抱える人は 100 人に 1 人程度とされるが、当事者団体によると吃音によるいじめや差別の実態を明らかにする調査は過去に例がない。

自身も吃音を抱え、専門医として吃音診断に当たる九州大病院の菊池良和医師の話―吃音の原因は言語中枢のある脳の左半球のネットワーク不全が定説だが、治療法は確立されていない。吃音者の 4-5 割が社交不安障害を抱え、うつ病を患うケースも多い。発音できない自分の名前を改名したり、自殺へ追い込まれたりする人もいる。学校や職場の理解で吃音者に良い環境が築ければ、症状が軽減する場合も少なくない。社会が吃音を障害であると認識することが重要だ。

じつは私も幼い頃から高校生の頃まで吃音（どもり）に悩まされた。近所のおばさんが「明ちゃんと遊ぶと、どもりがうつる」というのを聞いて、押入で泣き続けたことが忘れられない。学校などでも、友だちから「どもり」の真似をされるのがいやだった。自殺に近いことを考えたこともあった。今でも極度に緊張すると、最初の言葉で出にくいこともあるが、吃音を気にすることはなくなった。35 年にわたり大学教員を勤めた。今回、吃音アンケートの自由記述などを読み、久しぶりに昔のことを思い起こした。

現在、吃音は努力で完治する「癖」ではなく、脳の機能障害が原因だとする学説が有力という。「お前の努力が足りないから、どもりが治らないのだ」と言われたこともある。これも辛かったが、人に隠れて声を出して、何回も何回も本を読んだ。そんな時は、どもらずに調子よく読めたものだ。吃音が脳の機能障害が原因で、「障害である」とは、これまで認識してこなかった。この 4 月から障害者差別解消法が施行され、その行方に関心を持っている。吃音という障害のばあい、法にいう「合理的配慮」をどう考えたらよいであろうか。やはり吃音という障害を理解すること、そして吃音者の気持ちに寄り添うことが大切だろう。とくに吃音者が発言する際、周りの人が焦らせないこと、吃音者のペースに合わせることも、合理的な配慮ではないか。またレポートしていきたい。

(2016 年 8 月 22 日)

